1

ア—イヲ

平凡社

大百科事典

ENCYCLOPÆDIA
HEIBONSHA

1

アーイ

平凡社 大百科事典

ENCYCLOPÆDIA
HEIBONSHA

大百科事典

1

1984年11月2日　初版発行
1984年印刷

全16巻揃予約特別定価—118,400円
1985年〈昭和60年〉6月30日まで

編集発行人——下中邦彦
発行所——平凡社
郵便番号 102
東京都千代田区三番町5
振替東京8-29639番
電話[03]265-0451番〈代表〉
[03]265-0455番〈営業〉

本文用紙——十条製紙株式会社
見返用紙——日清紡績株式会社
製版・印刷——株式会社東京印書館
株式会社ハナマチック・センター
フォト印刷株式会社

クロース——ダイニック株式会社
表紙箔押——斎藤商会
製本——和田製本工業株式会社

©株式会社 平凡社　1984 Printed in Japan　②

《大百科事典》刊行にあたって

このたび発刊の運びとなりました《大百科事典》全16巻は，《世界大百科事典》を引き継ぐ最大規模の百科事典として構想され，1970年代を通じて今日まで編集刊行の準備を進めてきたものであります。

1955年，小社は，近代日本に稀有のアンシクロペディスト林達夫氏を編集長に，氏と小社の創業者下中弥三郎とによる基本方針にもとづいて，《世界大百科事典》全32巻の刊行を開始し，1959年，これを完結せしめて，世に問いました。この《世界大百科事典》は，日本における最高の知的体系として，高く評価され，多くの読者の御愛顧を受けることができました。さらに小社では，その後，数次にわたって大改訂を行い，また《世界大百科年鑑》等の追補のシステムを確立して，この知的体系の維持と更新とに努めてまいりました。

しかしながら，元版の基本構想がたてられて以来30数年，この間の学問・文化・社会の全領域にわたる変化は，よくもあしくも実にめざましいものがあり，まさにわれわれは時代の大きな転換を経験しつつあるといっても過言ではありません。この転換に全体としてこたえうる書物は，本格的な百科事典をおいてほかにないと信じます。なぜならば，すぐれた百科事典は，壮大な知的所産であるだけではなく，そこに収められた知識を読者が利用するためのシステムを内蔵するところに，書物としての大きな特質があり，この二重の意味で，百科事典は時代を代弁する知的体系たりうるからであります。

この転換期にあたり，これまでの百科事典の枠組みと視点を，みずから大胆に見直し，いわば20世紀文化を総決算すべき大百科事典を刊行することは，小社に与えられた使命と考え，1971年，創業70周年の記念出版として，この大企画に着手いたしました。

大百科事典は，林達夫氏の述べられたごとく，〈一国の文化の標識〉であり，その刊行は，いわば極限ともいえる多数の協力者と長期にわたる編集期間を要する事業であります。小社70年の社業においても，基本的な設計の段階からまったく新たに編纂された大百科事典を出版することは，ようやく3度を数えるにすぎません。幸いにして，新しい《大百科事典》は，計画立案の当初から，加藤周一編集長をはじめ，学問・文化の各分野の編集委員500余人の方々の全面的な御協力をいただき，さらに7000人にのぼる専門執筆者の方々の御尽力を得て，計画着手後13年にして，ようやくここに誕生いたしました。

《大百科事典》の刊行を迎え，加藤周一編集長，編集委員をはじめ，御執筆の諸先生方の積年の御助力に改めて感謝いたしますとともに，ここに収められた現代の経験と英知が，読者の生きた好奇心と結びつき，知ることの楽しさをとおして活用され，やがて，21世紀の文化をかたちづくる手がかりとなることを願ってやみません。

1984年11月

平凡社社長　下中邦彦

《大百科事典》の編集方針について

［現代は情報が多すぎて，また少なすぎる時代である］

一般の市民は，新聞・雑誌・書籍・電波メディアの伝える情報の，いわば洪水のなかで暮らしている。限られた時間のなかで，どういう本を読むべきか。選択は必ずしも容易でない。しかも情報の量は，どの領域でも急速に増大し，新しい事実が知られ，新しい概念が導入され，新しい仮説が提案される。非専門家ばかりでなく，専門の研究者にとってさえも，追いついてゆくことがむずかしいだろう。

このような情報量の増大とその広範な伝達が成り立つための条件の一つが，政府機関や大企業が経営する大きな組織の活動であることは，いうまでもない。したがって，市民が受け取る情報のなかには，政治的または商業的な目的のために操作されたものもある。

受取り側は，どう反応することができるだろうか。もし右往左往して，しかも受身に操られることを望まないとすれば，多すぎる情報を整理しなければならないし，特にみずからの立場に従って整理しなければならないだろう。

情報または知識の蓄積の，もう一つの条件は，専門化である。研究者や技術者は，いよいよ細分化された領域で，またその領域でのみ仕事をする。そこでは，同じ領域の専門家の間でしか通用しない特殊な術語の体系も発達する。彼らの話は，素人にはわかりにくい。またたとえわかっても，市民が個人的にも，社会的にも，知りたいと思う事物の全体ではなくて，一面を語るにすぎない。情報の洪水のなかで，ほんとうに知りたいことについては，利用することのできる情報が，あまりにも少ないということになる。

そういう情報の不足に対応するためには，知りたい対象の全体を念頭におきながら，部分的な情報をまとめてゆくほかはない。また専門家に，情報の正確さを犠牲にしないままで，しかもわかりやすく話すくふうを求めるほかはないだろう。

百科事典が，このような現代社会の要請に応じるためには，従来の百科事典の改訂ではなくて，まったく新たに編集の方針そのものを考えなおす必要がある。この百科事典が，多すぎる情報を整理し，細分化された知識をまとめ，専門家の表現を非専門家にわかりやすくするために採用した方針は，次のようなものである。

［整理のために］

1――知識の体系については，中心的な概念の説明を重んじ，技術については，その原理を重んじた。たとえばコンピューターについて，論理回路の意味を懇切ていねいに解説し，その技術的な細部や応用範囲をできるだけ簡潔に述べる。これは幹と枝葉とをはっきり区別するということである。たとえ枝葉にめざましい変化があっても幹は変わらないから，この方針は，日進月歩の領域で，この事典の記述が古くならないということをも意味するだろう。

2――事典は執筆者または編集者の意見を発表するための機関ではない。しかし特定の立場をとらずに情報を整理することはできないだろう。この事典が基本的な立場としたのは，平和と民主主義と人権の擁護である。

3――また地域的には，日本を中心として，近きより遠きへ及ぼした。項目は，

日本に近いほど多く，記述は，原則として，日本とのかかわりの深いほど詳細である．たとえば朝鮮半島の歴史・文化・社会にかかわる項目は，過去および現在の日本語によるあらゆる百科事典のそれよりも，はるかに多くを採る．また，たとえば西洋の人物や事件については，その日本とのかかわり（作品の翻訳，事件の影響など）をできるかぎり詳しく述べる．

4――整理とは分類であるが，この事典での分類は，必ずしも従来の慣習に従わず，しばしば叙述の効率を規準として，新しい分け方を用いた．たとえば，〈アメリカ合衆国〉という国名での記述を抑えて，地域や大都市の項目の記述を豊富にする．この方法は，またたとえばアフリカ大陸についても有効であろう．国境の意味は，人種的・文化的・言語学的・宗教的に，必ずしも決定的でない．

［**まとめのために**］

1――同じ地域の問題を扱うのに，専門領域を異にする委員会の学際的討議を重んじた．互いに関係のない専門的知識の並列ではなくて，その間の関係を求め，対象の全体が見失われないように努めたのである．

2――また地域に限らず，他の項目，特にたとえば動植物の名前などについても，学際的な記述を重んじた．したがってこの事典は，動物学者の述べる〈鶴〉に満足せず，同時に民俗学者の語る日本の伝説のなかでの〈鶴〉を併記する．〈鶴〉に関する知識を，たとえば《夕鶴》の理解にも役だちうるようにまとめようとした．

3――事実と仮説とを区別したうえでそれを関連づけ，歴史と伝説とを峻別したうえでその関係を説明しようとした．伝説の重要さには特別の注意を払う．たとえば歴史的事実のほとんど何も知られていない小野小町や弁慶の伝説的人物としての役割を詳述する．

［**わかりやすさのために**］

1――科学技術上の概念を厳密に定義するためには術語を用いなければならない．しかしそういう定義に立ち入る前に，術語を知らない読者にも，近似的な理解，あるいは大づかみな要領の会得が可能になるような説明を与えることにした．今までの百科事典の，正確ではあっても難解な記述に閉口した経験のある読者は，この事典を見て，科学技術上の用語のおよその意味をたちどころに把握できることに，驚くだろう．

2――歴史的に，また地域的に，意味を異にする言葉がある．そういう言葉については，語義の変遷や地域差にも立ち入って説明することにした．その言葉を用いた本文の解釈を正確にするために役だつはずである．

3――図版についても，ここでは目的合理性を貫いた．目的とは，限られた紙面のなかで必要にして十分な情報を与えることである．カラー写真の多くは百科事典の飾りものにすぎない．また一般に写真は，不必要な細部をも含み，必要な情報（たとえば対象の内部）を示さないことが多いから，手書きの挿絵・模型・地図の類を重んじることにした．それによって，要点を示し，枝葉を切り捨てることができる．

編集の方針は以上のとおりである．それがどの程度に実現されているかは，事典を利用する方々の判断にまつほかはない．この事典は，専門領域以外の事物について，早く，正確な情報を得たいと思う日本国民のだれでも利用することのできる道具である．道具が役にたつだろうことを切に願う．

《大百科事典》編集長　加藤周一

編集顧問・編集委員一覧

編集顧問—五十音順

伊藤正男——東京大学教授
今西錦司——京都大学名誉教授
宇沢弘文——東京大学教授
梅棹忠夫——国立民族学博物館館長
江上波夫——東京大学名誉教授
桑原武夫——京都大学名誉教授
小谷正雄——東京大学名誉教授
西郷信綱——国文学者
佐藤進——中央大学教授
島田虔次——京都大学名誉教授
中野好夫——評論家
林達夫——評論家
藤田省三——法政大学教授
古島敏雄——東京大学名誉教授
増田四郎——一橋大学名誉教授
向坊隆——東京大学名誉教授
吉田秀和——評論家

編集委員・項目選定委員—五十音順

青山博之——東京大学教授　建築
青山善充——東京大学教授　民事訴訟法
妹場準——一橋大学教授　国際私法
秋葉鐐二郎—国立宇宙科学研究所教授　宇宙工学
秋山守——東京大学教授　原子力工学
秋山稔——東京大学教授　通信工学
浅井冨雄——東京大学教授　気象学
浅山英——元千葉大学助教授　園芸学
東博彦——埼玉医科大学教授　整形外科学
阿部謹也——一橋大学教授　ドイツ史
阿部斉——筑波大学教授　政治学
網野善彦——神奈川大学短期大学部教授
日本史・中世
新井吉衛——新井計画事務所所長　合成化学
荒川幾男——東京経済大学教授　哲学
荒牧重雄——東京大学教授　火山学
荒俣宏——評論家　文学
猪木慶治——東京大学教授　物理学
生松敬三——中央大学教授　哲学
池上岑夫——東京外国語大学教授
ポルトガル文学
池田次郎——京都大学教授　自然人類学
池端雪浦——東京外国語大学助教授
東南アジア史
石井吉徳——東京大学教授　資源工学
石井米雄——京都大学教授　東南アジア史
石川栄吉——東京都立大学教授
社会人類学・オセアニア
石樽顕吉——東京大学教授　原子力工学
石毛直道——国立民族学博物館教授　文化人類学
石田尚豊——青山学院大学教授　日本美術史
石田米子——岡山大学助教授　中国史
泉治典——東洋大学教授　哲学・キリスト教史
板垣雄三——東京大学教授　中東現代史
伊谷純一郎—京都大学教授　動物学
市村惠——浜松医科大学講師　耳鼻咽喉科学
伊藤亜人——東京大学助教授　文化人類学・朝鮮
伊藤清——学習院大学教授　数学
伊藤邦夫——東京大学助教授　金属材料学
伊東俊太郎—東京大学教授　科学史・科学哲学
伊藤清三——東京大学教授　解析学
伊東孝之——北海道大学教授　ポーランド史
伊藤正男——東京大学教授　生理学
稲垣良典——九州大学教授　哲学・キリスト教史
稲上毅——法政大学教授　社会学
稲葉次郎——放射線医学総合研究所　環境衛生
稲葉三千男—東京大学教授　コミュニケーション
乾裕幸——帝塚山学院大学教授
日本文学・近世
井上祥平——東京大学教授　高分子化学
井上新一朗—生命保険文化研究所　生命保険
井上外志雄—東京大学教授　資源工学
井上正仁——東京大学助教授　刑事法
猪木武徳——大阪大学助教授　理論経済学
井口洋夫——分子科学研究所教授　有機半導体
今井圭子——上智大学助教授
ラテンアメリカ経済史
今井宏——東京女子大学教授　イギリス近代史
今泉吉典——国立科学博物館動物部長　動物学
今島実——国立科学博物館　動物学
今村奈良臣—東京大学助教授　農業経済学
伊理正夫——東京大学教授　数値解析
岩崎孝——早稲田大学助教授　資源工学
岩田誠——東京大学助教授　神経内科学
岩槻邦男——東京大学教授　植物学
岩淵達治——学習院大学教授　演劇
岩見宏——神戸大学教授　中国史
上田誠也——東京大学教授　地球熱学
上谷博——天理大学助教授
ラテンアメリカ政治史
植手通有——成蹊大学教授　日本思想史
上野格——成城大学教授
アイルランド史・経済学史
植村武——新潟大学教授　構造地質学
宇沢弘文——東京大学教授　理論経済学
牛島信明——東京外国語大学助教授
スペイン文学
氏原正治郎—東京大学名誉教授・労働経済
内尾高保——東京大学教授　海洋地質学
内川芳美——東京大学教授　コミュニケーション
内田英治——気象庁予報部長　気象学
内田安三——東京大学教授　有機工業化学
内田祥哉——東京大学教授　建築
宇津徳治——東京大学教授　地震学
宇都木伸——獨協医科大学講師　医事法
宇野俊——千葉大学教授　日本史・近代
梅田高照——東京大学助教授　金属工学
梅原郁——京都大学教授　中国史
梅原利夫——和光大学助教授　教育学
浦本昌紀——和光大学教授　動物学
瓜生敏之——東京大学教授　高分子化学
江草周三——東京大学名誉教授　水産学
江原由美子—お茶の水女子大学講師　女性学
応地利明——京都大学助教授
人文地理学・インド
翁長一彦——運輸省船舶技術研究所　船舶工学
大石嘉一郎—東京大学教授　日本近代経済史
大河直躬——千葉大学教授　日本建築史
大木靖衛——神奈川県立温泉地学研究所所長
火山学
大久保忠恒—上智大学教授　材料工学
大隅和雄——東京女子大学教授　日本文化史
太田秀通——東京都立大学名誉教授　ギリシア史
大辻清司——筑波大学教授　写真
大貫良夫——東京大学助教授
文化人類学・ラテンアメリカ
大野瑞男——東洋大学教授　日本史・近世
大橋脩作——日本石炭協会　資源工学

大橋秀雄——東京大学教授　機械工学
大林太良——東京大学教授　文化人類学
大原祐子——東京大学助教授　カナダ史
大村益夫——早稲田大学教授　朝鮮文学
大森昌衛——麻布大学教授　古生物学
岡崎敬——九州大学教授　考古学
岡田泰男——慶応義塾大学教授　アメリカ史
岡田康司——日本長期信用銀行　商業
岡野行秀——東京大学教授　交通経済学
岡村弘之——東京大学教授　機械工学
大給近達——国立民族学博物館教授
文化人類学・ラテンアメリカ
奥田和彦——専修大学教授　市場調査論
小口泰平——芝浦工業大学教授　自動車工学
小倉重男——電通PR局　広告
小澤俊夫——筑波大学教授　民話学
小田英郎——慶応義塾大学教授　アフリカ史
越智道雄——明治大学教授
オーストラリア文学
鬼塚雄丞——横浜国立大学教授　国際経済学
小野山節——京都大学教授　考古学
垣見俊弘——地質調査所　構造地質学
風間喜代三——東京大学教授　言語学
梶村秀樹——神奈川大学教授　朝鮮史
柏倉昌美——評論家　映画
柏谷博之——国立科学博物館　植物学
粕谷豊——東京大学教授　薬学
片山恒雄——東京大学教授　土木工学
勝俣鎮夫——東京大学助教授　日本史・中世
勝村哲也——京都大学助教授　中国史
桂井誠——東京大学助教授　電子工学
加藤順三——山梨医科大学教授　産婦人科学
加藤秀俊——学習院大学教授　社会学・風俗史
加藤博夫——共同通信社　スポーツ
金井光太朗——東京大学助手　政治学
金関寿夫——駒沢大学教授　アメリカ文学
金子宏——東京大学教授　租税法
金子隆——評論家　写真
兼平慶一郎——千葉大学教授　鉱床学
狩野久——奈良国立文化財研究所
日本史・古代
鎌田純——皇学館大学教授　日本史・神道史
上村洸——東京大学教授　物理学
亀井俊介——東京大学教授
アメリカ文学・文化史
萱嶋泉——国立音楽大学教授　動物学
辛島昇——東京大学教授　インド史
河岡武春——神奈川大学教授　日本漁業史
川勝義雄——京都大学教授　中国史
川喜多喬——東京外国語大学助教授　社会学
川北稔——大阪大学助教授　イギリス近世史
川崎寿彦——名古屋大学教授　イギリス文学
河島英昭——東京外国語大学教授　イタリア文学
川嶋行彦——国際商科大学助教授　流通経済論
川瀬太郎——千葉大学教授　電気工学
川田順造——東京外国語大学教授
文化人類学・アフリカ
川田信一郎——東京大学名誉教授　農学
川端香男里——東京大学教授
比較文学・ロシア文学
河村武——筑波大学教授　環境科学
河村忠男——土木学会　土木工学
川本信正——評論家　スポーツ
菅野昭正——東京大学教授　フランス文学
菊池方利——東京大学助手　内分泌学
喜志哲雄——京都大学教授　演劇
岸俊男——橿原考古学研究所所長
日本史・古代
来生新——横浜国立大学助教授　経済法
木田元——中央大学教授　哲学
北川誠——弘前大学助教授　言語学・カフカス
北川尚史——奈良教育大学教授　植物学
北原敦——北海道大学助教授　イタリア史
北村忠夫——名古屋大学教授　西洋中世史
北村哲郎——共立女子大学教授　工芸・染織
北村甫——東京外国語大学教授　言語学
北森俊行——東京大学教授　制御工学
木原啓吉——千葉大学教授　環境問題
木原諄二——東京大学助教授　金属塑性加工
木村重信——大阪大学教授　原始美術
木村孟——東京工業大学教授　土木工学
木村秀政——日本大学名誉教授　航空
喜安朗——日本女子大学教授　フランス史
京極純——千葉大学教授　政治学
桐敷真次郎——東京都立大学教授　西洋建築史
金七紀男——東京外国語大学教授　ポルトガル史
草野妙子——桐朋学園大学講師　朝鮮音楽
楠宏——国立極地研究所教授　雪氷学
工藤翔二——駒込病院　呼吸器内科学
国井乙彦——東京大学助教授　感染症学
国本伊代——中央大学助教授　ラテンアメリカ史
久保正彰——東京大学教授　西洋古典学
熊倉功夫——筑波大学助教授　日本文化史・茶
神代修——同志社大学教授
アフロ・アメリカ文学
熊野聰——滋賀大学教授　北欧史
粂野豊——筑波大学教授　体育社会学
栗原彬——立教大学教授　政治社会学
栗原福也——東京女子大学教授　オランダ史
黒田悦子——国立民族学博物館助教授
文化人類学・ラテンアメリカ
黒田俊夫——日本大学教授　人口学
小池滋——東京都立大学教授　イギリス文学
小泉保——大阪外国語大学教授
言語学・フィンランド史
小磯謙吉——筑波大学教授　泌尿器科学
香内三郎——東京大学教授　新聞学
神品芳夫——東京大学教授　ドイツ文学
河野照哉——東京大学教授　電気工学
河野六郎——言語学者　言語学
国分征——東京大学教授　超高層物理学
小島荘明——信州大学教授　寄生虫学
小嶋稔——東京大学教授　地球年代学
小平桂——東京大学教授　恒星物理学
後藤和彦——常磐大学教授　放送
小西正捷——立教大学教授　文化人類学・インド
五野井隆史——東京大学助教授
日本史・キリシタン
小林一宏——上智大学教授　イベリア史
小林俊——東京大学助教授　物理学
小林致広——神戸市外国語大学助教授
文化人類学・ラテンアメリカ
小林行雄——京都大学名誉教授　考古学
小原雅俊——大東文化大学教授　ポーランド文学
小南一郎——京都大学助教授　中国文学
小山健夫——東京大学教授　船舶工学
今防人——相模女子大学教授　社会学
近藤駿介——東京大学教授　原子力工学
西郷信綱——国文学者　日本文学・古代
斎藤和久——慶応義塾大学教授　細菌学
斉藤忠夫——東京大学教授　電気工学
斎藤真——国際基督教大学教授　アメリカ史
阪下圭八——東京経済大学教授　日本文学・古代
坂田貞二——拓殖大学教授　インド文学
阪中友久——朝日新聞社編集委員　軍事
坂本勉——慶応義塾大学助教授　イラン史
坂本満——お茶の水女子大学教授　西洋美術史
坂本義和——東京大学教授　国際政治
桜井勤——評論家　バレエ
桜井由躬雄——京都大学助教授　東南アジア史
佐々木高明——国立民族学博物館教授
文化人類学
佐々木毅——東京大学教授　政治思想史
佐々木尚人——上智大学教授　経営学
佐々木尚友——新宿御苑苑長　園芸学
佐々木有司——日本大学教授　西洋法制史
佐竹昭広——京都大学教授　日本文学・中世
佐藤進——中央大学教授　日本史・中世
佐藤進——信州大学助教授　オリエント史
佐藤次高——東京大学助教授
アラブ・イスラム史
佐藤久——東京大学名誉教授　地理学
佐野信雄——東京大学教授　鉄冶金学
佐原眞——奈良国立文化財研究所　考古学
塩田重利——東京医科歯科大学教授　口腔外科
式正英——お茶の水女子大学教授　地理学
重松伸司——名古屋大学助教授　インド史
地主重美——千葉大学教授　社会保障
篠田一士——東京都立大学教授　文学
柴崎達雄——東海大学教授　応用地質学
島田修——中央大学教授　社会教育
清水廣一郎——東京都立大学教授　イタリア史
清水茂——京都大学教授　中国文学
清水大吉郎——京都大学助手　地史学
清水忠雄——東京大学教授　物理学
清水透——東京外国語大学助教授
ラテンアメリカ史
清水英夫——青山学院大学教授　出版
清水学——アジア経済研究所
南アジア現代史
下鶴大輔——東京大学教授　火山学
下野義朗——愛知県立大学教授　西洋中世史
正田陽——東京大学教授　畜産学
神保博行——中央大学教授　日本文化史・番

菅原操——東京理科大学教授　土木工学
杉崎昭生——東京商船大学教授　航海学
杉原泰雄——橋大学教授　憲法
杉村棟——国立民族学博物館助教授
イスラム美術
鈴木篤之——東京大学助教授　原子力工学
鈴木順——運輸調査局　交通経済学
角倉一朗——東京芸術大学教授　音楽
関寛治——東京大学教授　国際政治
関川栄一郎—評論家　航空工学
相馬智——杏林大学教授　外科学
薗田稔——国学院大学教授　宗教学
ソペーニャ，J.——上智大学教授
スペイン史
染田秀藤——大阪外国語大学助教授
ラテンアメリカ史
高木昭作——東京大学教授　日本史・近世
高木秀卓——東京海上火災保険　損害保険
高階秀爾——東京大学教授　西洋美術史
高田昭彦——成蹊大学助教授　社会学
高田誠二——北海道大学教授　科学方法論
高取正男——京都女子大学教授　日本民俗学
高橋徹——東京大学教授　社会学
高橋進——東京大学助教授　国際政治史
高橋裕——東京大学教授　土木工学
高谷好——京都大学教授
地理学・東南アジア
竹内啓——東京大学教授　統計学
竹内啓——橋大学教授
社会地理学・イタリア
竹内宏——日本長期信用銀行　産業
竹内敬人——東京大学助教授　有機化学
武田弘——東京大学教授　鉱物学
武田幸男——東京大学教授　朝鮮史
武正建——杏林大学教授　精神神経科学
田隅本生——京都大学助教授　動物形態学
多田富雄——東京大学教授　免疫学
龍田節——京都大学教授　商法
田中彰——東京大学教授　資源工学
田中二郎——弘前大学教授
文化人類学・アフリカ
田中琢——奈良国立文化財研究所　考古学
田中稔——国立歴史民俗博物館教授
日本史・書道史
田辺三郎助—東京国立博物館　日本美術史
田辺裕——東京大学助教授
人文地理学・フランス
谷泰——京都大学教授　文化人類学
谷浦孝雄——アジア経済研究所
朝鮮経済・地理
谷川道雄——京都大学教授　中国史
谷口幸男——広島大学教授　北欧文学
千田博昭——大和証券経済研究所　証券
千原光雄——筑波大学教授　植物学
塚谷恒雄——京都大学助教授　環境経済論
塚本勝一——富士通顧問　軍事
佃弘子——大阪市立大学教授　動物生理学
柘植元一——東京芸術大学助教授　音楽

辻惟雄——東京大学教授　日本美術史
辻瑆——放送大学教授　ドイツ文学
土屋健治——京都大学助教授
インドネシア現代史
筒井迪夫——東京大学教授　林政学
都築勉——立教大学助手　政治学
常脇恒一郎—京都大学教授　遺伝学
椿啓介——筑波大学教授　植物学
坪井清足——奈良国立文化財研究所所長　考古学
寺尾方孝——法政大学教授　政治学
寺本俊彦——東京大学教授　海洋物理学
道家達将——東京工業大学教授　技術史
遠山茂樹——専修大学教授　日本史・近代
徳江元正——国学院大学教授　日本文学・中世
徳田直宏——愛知県立芸術大学助教授
西洋中世史
徳久球雄——青山学院大学教授　地理学・登山
利谷信義——東京大学教授　法社会学・民法
礪波護——京都大学助教授　中国史
冨永博夫——東京大学教授　有機工業化学
友枝啓泰——国立民族学博物館助教授
文化人類学
友部直——共立女子大学教授　西洋美術史
鳥山成人——北海道大学教授　ロシア・東欧史
直井英雄——東京理科大学助教授　建築
直野敦——東京大学教授　東欧文学
長尾真——京都大学教授　情報科学
長尾龍——東京大学教授　法哲学
中岡稔——大阪大学教授　幾何学
中川米造——大阪大学教授　医学史
長島正治——杏林大学教授　皮膚科学
永田雅宜——京都大学教授　代数学
永田雄三——東京外国語大学助教授　トルコ史
長滝重義——東京工業大学教授　土木工学
長友信人——国立宇宙科学研究所教授　宇宙工学
長野敬——自治医科大学教授　生物学史
中野政樹——東京芸術大学教授　日本美術史
中林信二——筑波大学助教授　武道
中原勝儼——立教大学教授　無機化学
中村とうよう—評論家　音楽
中村昌生——京都工芸繊維大学教授
日本文化史・茶
中村喜和——橋大学教授　ロシア文学
中山信弘——東京大学助教授　無体財産権法
南雲仁一——東京大学教授　情報科学
並木浩一——国際基督教大学助教授　聖書学
楢崎彰一——名古屋大学教授　考古学・陶磁
西江雅之——早稲田大学教授
言語学・文化人類学・アフリカ
西尾勝——東京大学教授　行政学
西川治——東京大学教授　地理学
西川大二郎—法政大学教授
人文地理学・ラテンアメリカ
西田典之——東京大学助教授　刑事法
西谷正——九州大学教授　考古学・朝鮮
西部邁——東京大学助教授　社会経済学
西松裕——東京大学教授　資源工学
西村肇——東京大学教授　化学工学

新田あや——京都大学助手　薬学
二野瓶徳夫—国立国会図書館　日本漁業史
二宮石雄——国立循環器センター　生理学
二宮宏之——東京外国語大学教授　フランス史
野口悠紀雄——慶大学教授　公共経済学
野村純一——国学院大学教授　日本民俗学
野村豪——東京大学教授　建築
野村好弘——東京都立大学教授　環境法
萩沢清彦——成蹊大学教授　労働法
萩原尊礼——東京大学名誉教授　地震学
萩原直——橋大学講師　バルカン史
萩原延壽——評論家　日英関係史
萩原幸男——東京大学教授　測地学
狭間直樹——京都大学助教授　中国史
橋本郁雄——学習院大学教授　ドイツ文学
橋本与良——元静岡大学教授　林学
橋本義彦——宮内庁正倉院事務所所長
日本史・古代
長谷川彰——東京水産大学教授　水産学
長谷川仁——北海道農業試験場　動物学
羽田昶——東京国立文化財研究所　芸能史
波多野里望—学習院大学教授　国際法
蜂屋順——杏林大学助教授　放射線医学
服部明彦——東京大学教授　海洋生化学
服部幸三——東京芸術大学教授　音楽
服部幸雄——千葉大学教授　芸能史
波部忠重——東海大学教授　動物学
浜田宏——東京大学教授　金融論
浜田隆士——東京大学教授　古生物学
早川庄八——名古屋大学教授　日本史・古代
林晃史——アジア経済研究所　アフリカ史
林良一——筑波大学教授　東洋美術史
林玲子——流通経済大学教授
日本史・近世商業
葉山禎作——埼玉大学教授　日本史・近世
針生一郎——和光大学教授　現代美術
日江井栄二郎—東京大学教授　太陽物理学
飛田武幸——名古屋大学教授　数理統計学
日高敏隆——京都大学教授　動物学
日原利国——京都大学教授　中国哲学
日比谷京——東京大学名誉教授　動物学
兵藤釗——東京大学教授　労働経済
平井宜雄——東京大学教授　民法
平田賢——東京大学教授　機械工学
平野健次——独協大学教授　日本音楽
平林勝政——国学院大学助教授　民法
平松義郎——名古屋大学教授　日本史・近世法
平山宏之——東京都立工科短期大学教授
応用物理
廣末保——国文学者　日本文学・近世
笛木和雄——東京大学教授　応用化学
深井晋司——東京大学教授　西アジア美術
福井勝義——国立民族学博物館助教授
文化人類学・アフリカ
福井有公——島根医科大学教授　法医学
藤井学——京都府立大学教授　日本史・仏教史
藤井弥太郎—慶応義塾大学教授　交通経済学
藤田省三——法政大学教授　日本思想史

藤田恒夫——新潟大学教授　解剖学
藤原彰——一橋大学教授　日本史・近現代
船山隆——東京芸術大学教授　音楽
古島敏雄——東京大学名誉教授　日本史・近世
不破敬一郎——東京大学教授　分析化学
別府輝彦——東京大学教授　農芸化学
細田瑳——自治医科大学教授　循環器内科学
堀田満——京都大学助教授　植物学
堀源一郎——東京大学教授　天体力学
堀元——東北大学教授　理論経済学
堀幸夫——東京大学教授　機械工学
堀内昭義——一橋大学助教授　金融論
前川久太郎——東京医科大学教授　解剖学
前田貞芳——武蔵大学教授　会計学
前田専学——東京大学教授　インド哲学
前田成文——京都大学教授
文化人類学・東南アジア
前田愛——立教大学教授　日本文学・近代
真壁肇——東京工業大学教授　経営工学
増子昇——東京大学教授　金属工学
松井三郎——金沢大学助教授　衛生工学
松井孝爾——日本両棲爬虫類研究所　動物学
松尾浩也——東京大学教授　刑事法
松尾弘毅——国立宇宙科学研究所助教授
宇宙工学
松尾陽——東京大学教授　建築
松下満雄——東京大学教授　経済法
松原秀——慶応義塾大学教授　フランス文学
松本四郎——都留文化大学教授
日本史・近世都市
間野英二——京都大学助教授　中央アジア史
丸尾敏夫——帝京大学教授　眼科学
丸山雍成——九州大学助教授　日本史・近世交通
三浦国雄——大阪市立大学助教授　中国哲学
三浦宏文——東京大学教授　機械工学
三上昭彦——明治大学助教授　教育行政
三上理一郎——奈良県立医科大学教授　内科学
三鬼清一郎——名古屋大学教授　日本史・安土桃山
水江漣子——文教大学教授　日本文化史・花
水木栄——富士写真フイルム　写真科学
水田珠枝——名古屋経済大学教授　女性史
水谷智洋——東京大学助教授　西洋古典学
水野昇——京都大学教授　解剖学
三隅治雄——東京国立文化財研究所　芸能史
溝口勲——東京都衛生研究所　公衆衛生
三根谷徹——東京大学名誉教授　言語学
三村浩史——京都大学助教授　都市設計
宮川洋——東京大学教授　通信工学
三宅立——明治大学教授　ドイツ史
宮治一雄——アジア経済研究所　アフリカ史
宮島直機——中央大学教授　ポーランド史
宮田登——筑波大学教授　日本民俗学
宮本憲——大阪市立大学教授　地域経済論
宮本忠雄——自治医科大学教授　精神医学
三輪史朗——東京大学医科学研究所教授　内科学
三輪剛——東海大学教授　消化器内科学
武藤恭彦——東京経済大学助教授　国際経済学
村井誠人——早稲田大学助教授　北欧史
村上處直——防災都市計画研究所所長　都市経済
村上陽一郎——東京大学助教授　科学史
村田郁夫——東京経済大学教授
言語学・バルト三国史
室井力——名古屋大学教授　行政法
茂木俊彦——東京都立大学助教授　教育心理
森卓也——評論家　映画
森岡弘之——国立科学博物館　動物学
森地茂——東京工業大学助教授　土木工学
森村正直——計量研究所　応用物理
森安達也——東京大学助教授
スラブ史・キリスト教史
八十島義之助——埼玉大学教授　土木工学
柳宗玄——武蔵野美術大学教授　西洋美術史
柳宗民——恵泉女学園短大講師　園芸学
柳田博明——東京大学教授　無機工業化学
柳田充弘——京都大学教授　分子生物学
矢野道雄——京都産業大学助教授
インド学・インド科学史
藪下史郎——横浜国立大学助教授　国際経済学
藪田敬次郎——順天堂大学教授　小児科学
山折哲雄——国立歴史民俗博物館教授　宗教学
山口梅太郎——東京大学教授　資源工学
山口和克——東京大学助教授　病理学
山崎元——国学院大学教授　インド史
山崎耕宇——東京大学教授　農業生物学
山崎広明——東京大学教授　日本近代産業史
山住正己——東京都立大学教授　教育学
山田宏——評論家　映画
山田睦男——筑波大学助教授　ラテンアメリカ史
山本隆太郎——印刷学会出版部　印刷科学
油井正——評論家　音楽
弓削達——東京大学教授　ローマ史
横道万里雄——東京芸術大学教授　芸能史
吉川忠夫——京都大学助教授　中国史
吉沢英成——甲南大学教授　経済理論
吉田宏一郎——東京大学助教授　船舶工学
吉田忠雄——東京大学教授　反応化学
吉田富夫——仏教大学教授　中国文学
吉田凞生——千葉大学教授　日本文学・近代
吉田宏志——大和文華館　朝鮮美術
吉村久秉——日本通信技術　通信工学
米山俊直——京都大学教授　文化人類学
良知力——一橋大学教授
ドイツ史・社会思想史
若松寛——京都府立大学助教授　北アジア史
脇坂誠——大船フラワーセンター　園芸学
和久井孝太郎——日本放送協会　電子工学
和田英——東京大学教授　情報科学
和田春樹——東京大学助教授　ロシア史
渡辺金——一橋大学教授　ビザンティン史
渡辺則文——広島大学教授　日本史・塩業
渡辺秀樹——電気通信大学助教授　社会学
渡辺守章——東京大学教授　演劇

編集長——加藤周一
造本・デザイン——杉浦康平
協力=谷村彰彦

[redacted]

〈大百科事典〉の編集方針を実現するために，以下に記すようなくふうをしました。

【項目の記述について】

［〈五十音順〉の項目配列］

この〈百科事典〉には約9万項目が収められていますが，分野別構成とはせずに，すべて五十音順に配列されています。多分野にまたがる概念や事項を総合的にとらえることは，分野別構成では不可能であり，五十音による配列が最も適していると考えるからです。

［〈目次〉による大項目の案内］

異なる社会の相互の対応を示したり，異なる分野間の総合化のために3～4ページを超えて編まれた大項目には，各項目の冒頭に内容を示す目次を掲げ，必要な部分が一目でわかるようにしました。

［〈基本データ〉の一覧］

国名・県名，諸惑星，諸元素の各項目では，それぞれ本文解説に先だって，それらの基本的なデータを要覧として掲げました。これにより，それぞれの国や県，惑星，元素についての概要をつかむことができます。さらには一種の便覧としての利用も可能です。

［〈コラム〉による奥行きのある解説］

本文のみでは必ずしも十分には説明しきれないような事柄，あるいは特記すべきと思われる事柄については，別枠としてコラムを設けて十全な解説を行いました。二，三の例を挙げれば，〈アメリカ合衆国〉の項目では〈大統領の選出過程〉について，〈イスラム〉の項目では〈イスラムの儀礼〉について，〈為替〉の項目では〈近世の為替の具体的方法〉について解説しています。また各県の項目には必ず〈……県の遺跡〉というコラムを作りました。

［〈用語解説〉による広がりのある解説］

この〈大百科事典〉では，非常に細分化された事項，細かい専門用語などは，独立項目としては採らずに〈用語解説〉としてまとめて解説しました。断片的な知識を得ることよりも，相互の比較，関連のなかでの理解を重視する編集方針を具体化したもので，これは，身のまわりの生活に関する用語から最新の工学専門用語にまで一貫しています。〈カクテル〉の項目で〈カクテル32選〉，〈オーディオ〉の項目で〈オーディオ用語〉，〈風〉の項目で〈風の異名〉，〈原子炉〉の項目で〈各種の原子炉〉についてそれぞれ別枠を設けてまとめて解説しているのはその一例です。また，おもなスポーツ競技についても，それぞれルール，用語をまとめて解説しました。これらの用語解説は，約9万の独立項目と補い合う形で，小項目事典的な要素をも併せもっています。

［関連諸項目への〈参照案内〉］

単なる専門知識の獲得よりも，理解を深め，広げ，あるいは思いがけない知的発見へと導かれることをたいせつにするという〈大百科事典〉の基本的な考え方に基づき，関連諸項目への参照案内（クロス・レファレンス）を豊富にしました。これには，語頭の左上に*を付したものと，文末に▶▶▶を付したものの二つのタイプがあります。*は，その項目自体を理解するうえで参考になる項目，あるいは立項されていても直接には引きにくい項目を示し，▶▶▶は，その項目の基本的理解のために必要不可欠な関連事項を示します。各項目はそれ自体でも十分理解できるよう配慮して記述されていますが，これら参照項目案内の利用により，知識のすそ野を広げるための知的散策が楽しめます。なお，直送項目（同義語，あるいは他の事項とともにまとめて記述した事項，他の表記で記述した事項など）においても，その送り先を▶▶▶で示しました。

［検索に便利な〈和文・欧文索引〉］

〈大百科事典〉で知りたい事項を引く場合には，まず，約40万の事項を収めた第16巻の索引を手がかりとしてください。索引は百科事典に収められたぼう大な情報を効率よくじょうずに引き出すための鍵です。この〈大百科事典〉の索引では，従来にない二つの新たなくふうを採り入れました。その一つは，主要な索引事項についてその事項がどの項目から採られているかを明示したことです。どの項目に必要とする記述があるかが，よりいっそう明確になりました。もう一つは，和文索引とは別に欧文索引を付したことです。訳語が不明であったり，読みがはっきりしないといった外国語出自の概念事項，地名，人名などについても，原語のアルファベット表記により直接検索することが可能になりました。具体的な使用法については第16巻をご覧ください。

【図版について】

［厳選された約1万点の図版］

現在，私たちをとりまく世界は刻々と移り変わっています。そして，各種の視覚メディアを通じて容易に得られる情報も数多くなっています。このような時代の百科事典は，当然その図版のあり方についても再考をせまられています。この〈大百科事典〉では思い切った方針をとりました。それは，百科事典のもつ本来の役割をあらためて問い直し，真に百科事典に求められる図版，すなわち，〈物の本質をとらえ原理を理解するうえで有効な図版〉のみを厳選する，ということです。日々変わりゆく市街の情景写真，絵はがき的観光写真，名画の単なる羅列といったものは収録せず，いっさいの飾りを排しました。こうして残ったものが，ここに掲げる約1万点の図版です。

［幅広い情報が得られる組図版］

動植物などは類縁のものと比較することによって，よりいっそうその特徴が浮かびあがってきます。また，花，果実，根といった細部の特徴は，その植物の全体像を示しただけではよく読み取れません。このように，個々ばらばらに見たり，全体を描いた一つの図からだけではその特質をはっきりとつかみきれないものについては，組図版を用意しました。また，動物についてはその生態をも表現するよう心がけました。さらに，動植物をはじめとして自然界には，世界の各文化の中で古くからさまざまな象徴として扱われてきたものが数多くあります。これらの文化史的な図版をも併せて示したことは，〈大百科事典〉の大きな特徴の一つです。

［新たな視点に立った美術の解説図版］

美術の分野では，鑑賞を目的としての名画の掲載はあえて割愛しました。その背後にある，それぞれの流派や様式・技法の本質的な特徴が何であるかをとらえることを第一義としたからです。たとえば，〈秋田蘭画〉や〈葛飾北斎〉といった項目をご覧いただければ，この意図は明白に理解されるでしょう。

［歴史の流れのなかで文化をとらえる図版］

〈アメリカ・インディアン〉〈アンデス文明〉〈ギリシア〉〈飛鳥美術〉など，世界および日本の重要な文化をあつかった項目では，年表などを組み合わせた総合図版ページを設けました。歴史の流れのなかで文化をとらえる基本的方針の具体化の一例です。地図についても，都市の形成，王朝・国の変遷などの歴史地図を重視しました。

［コンピューター・マップの採用］

各県の項目には必ず地形および人口分布を示すコンピューター・マップを掲げました。これは，1km²ごとの地形（高低）と人口分布をコンピューターによって立体的に描いたもので，各県の南東約45度の方角から，俯角45度で見下ろしています。各県の本文解説では，県をいくつかの地域に分けてそれぞれの特徴を記述していますが，この地域分けもこの地図上に併せて表示しました。

【組体裁について】

［横組みの採用］

自然科学における数式や化学式，外国文化を記述する場合の欧文表記などを考えると，本格的な総合百科事典は必然的に横組みとなります。小社の百科事典が一貫して横組みを採用しているのはこのためです。この〈大百科事典〉の本文は3段横組み（1段は18字詰66行）です。

［ユニット化によるコンパクトな構成］

図版は，原則としてその項目のある見開きページの右の欄に集めてあります。それぞれの図版は，3行を基本単位（ユニット）として，その倍数のスペースにできるだけコンパクトにまとめました。また，巻次，ページ，引き文字も一体化して1段3行に収め，各ページの最下欄に示しました。

［本文中の事項と図・表との関連の明示］

図版，表，年表のある事項については，本文中に図，表のマークを付してあります。また逆に，図，表には，それぞれの冒頭に項目名を示し，相互の検索の便をはかりました。

[illegible] www.antiquebook.com

凡例

見出し語

❶—見出し語は，かな見出しを太字のかなで示し，次に漢字または欧文を掲げた。

あいち 愛知[県]
アイルランド Ireland

❷—かな見出しは，日本語(日本慣用の字音読みによる漢字を含む)はひらがな，外国語(外来語を含む)はカタカナとした。日本語と外国語の合成語は，日本語の部分はひらがな，外国語の部分はカタカナとした。

アルカリせいしょくひん アルカリ性食品

❸—日本語のかな表記は〈現代かなづかい〉で表した。〈おう〉と〈おお〉，〈じ・ず〉と〈ぢ・づ〉を区別するとともに，〈ち・つ〉が連音により濁音化したものは〈ぢ・づ〉を用いた。

おうちょうもの 王朝物
おおさか 大阪[府]
あづまかがみ 吾妻鏡

❹—動植物名はカタカナをかな見出しとし，必要に応じて漢字を示し，英名，学名を付記した。

ウシ 牛 domestic cattle¦ *Bos taurus*
アワ 粟
foxtail millet¦ *Setaria italica* Beauv.

❺—元素名，化学物質名，岩石・鉱物名などは，かな見出しはひらがなとし，学術用語により部分的にカタカナ表記とするものは，カタカナ表記の( )内に漢字を示した。

りん リン(燐) phosphorus
かこうがん 花コウ(崗)岩 granite

❻—日本，中国，朝鮮の人名は，原則として姓，名の順とし，生没年は西暦で示した。日本人名は日本年号を( )内に付記した。中国人，朝鮮人以外の外国人名は原語つづりで表記し，かな見出しはファミリーネームで示した。

おだのぶなが 織田信長
1534-82(天文3-天正10)
もうたくとう 毛沢東 Máo Zé dōng
1893-1976
ワシントン George Washington
1732-99

❼—人名の称号は，原則として割愛した。

❽—中国，朝鮮の人名，地名は日本語読みとし，漢字のほかに，中国のものには拼音ピンインを，朝鮮の場合はハングル音をマッキューン=ライシャワー方式で表示したものを付記した。なお，原音および原音の転訛で通用しているものは，これをかな見出しとした。

うんなん 雲南[省] Yún nán shěng
はくとうさん 白頭山 Paektu-san
ナンキン 南京 Nankin¦ Nán jīng

❾—外国語を出自とする概念語などには外国語を付記し，英語以外については必要に応じて[ ]内に何国語であるかを示した。

しょうどう 衝動 impulse¦ impulsion
きか 帰化
naturalization¦ Einbürgerung[ドイツ]

❿—欧米語で語形の似通うものは英語で代表させた。地名で複数の国にまたがるもの(山脈，海など)は，見出し語には英語を掲げ，必要に応じて本文中で各国の呼称を示した。
⓫—人名，地名以外の中国の項目にも，拼音を付記した。

かきょ 科挙 Kē jǔ

⓬—かな見出しがカタカナの外国の自然地名では，山，山脈，峠，川，湖，島，諸島，群島，列島，岬，峰は[ ]内に示した。

アンデス[山脈] Cordillera de los Andes
コディアク[島] Kodiak Island
コロンビアこうげん コロンビア高原
Columbia Plateau

配列

項目の配列は次の基準に従った。
❶—五十音順に配列し，促音，拗音も音順に数え，清音→濁音→半濁音の順とした。
❷—同音の項目は，カタカナ→ひらがな→漢字の順とし，促音，拗音など小字となるものは並字の後においた。
❸—中黒(・)，音引(ー)のあるものは中黒，音引のないものの後においた。
❹—同音の漢字項目は，第1字目の字画の少ないものから配列した。また，第1字目が同字画のときは，第2字以降の字画の少ないものからの順とした。
❺—同音同字の項目の配列は地名→人名→一般名詞の順に配列した。ただし，地名，人名に関しては次の基準に従った。
ⓐ日本地名は，自然地名→歴史地名→行政地名→その他，の順とした。
ⓑ外国地名は，国名→自然地名→地方名→行政地名→その他，の順とし，次に所属国名の五十音順とした。
ⓒ人名は，架空人名→実在人名の順。
ⓓ日本人名は生年順。
ⓔ外国人名は，パーソナルネームの欧文アルファベットの順に配列した。同姓同名の場合は生年順。

本文

❶—本文の記述は簡明な表現とし，難解な漢語，敬語の使用はなるべく避けた。
❷—かなづかいは〈現代かなづかい〉により，固有名詞，固有術語，引用文などでは旧かなづかいも用いた。
❸—漢字は，〈常用漢字表〉〈人名漢字表〉に掲げられたものは一般にその字体を用い，それ以外は慣用のあるものを除いて正字ないしは通用の字体を用いた。難読の漢字，誤読のおそれのある漢字には振りがなを施した。
❹—送りがなは〈改定送り仮名の付け方〉によって付し，活用のある語から転じた名詞および複合名詞では，慣用のあるものは送りがなを付けなかった。また，歴史用語などで特有の表記のあるものはそれに従った。
❺—直送項目は ▸▸▸ で送り先を示し，参照送りは文中では各語の語頭の左上に ▸ を付し，文末ではとくに参照要望度の強い語句を抜き出し ▸▸▸ によって示した。
❻—大項目などで，いくつかの内容に分けて記述する場合は次のような区分をした。大見出し(【 】でかこむ)，中見出し(【 】でかこむ)，小見出し([ ]でかこむ)。
❼—度量衡の単位はメートル法で示したが，尺貫法，ヤード・ポンド法が慣用されているものはそれによった。
❽—年代は原則として西暦で表記し，日本年号，中国暦その他を示す必要がある場合は( )内に示した。日本年号は，改元がまたがる場合，月日に関係なく新元号で示した。なお，日本の南北朝時代の年号は南朝，北朝の順で示した。

符号・記号

❶—記述記号
《 》書名，曲名，作品名，論文名などをかこむ。
〈 〉引用文または語句，特定の呼称，語義などをかこむ。
[ ] 見出し語中の地名の行政単位，自然地名の種類，語の限定などをかこむ。
¦ 2種以上の見出し，新旧両暦，2種以上の参照送り，2種の年号表記，2種以上の振りがなを区切るのに使用。
❷—漢字略語
ⓐ国名，地域名については必要に応じて次のような略称を使用した。
亜(アジア)，阿(アフリカ)，米(アメリカ)，英(イギリス)，伊(イタリア)，印(インド)，

豪(オーストラリア)，墺(オーストリア)，蘭(オランダ)，加(カナダ)，西(スペイン)，ソ(ソ連)，中(中国)，独(ドイツ)，土(トルコ)，仏(フランス)，普(プロイセン)，墨(メキシコ)，欧(ヨーロッパ)，露(ロシア)

ⓑ国指定の名勝，天然記念物などの略語名(名勝)，特名(特別名勝)，天(天然記念物)，特天(特別天然記念物)，史(史跡)，特史(特別史跡)

ⓒ図・表

図 挿絵，地図，グラフ，写真など

表 年表，統計表など

外国語のかな表記について

外国語のカタカナ表記の基準は，下記のとおりである．

❶全体として，現地音を尊重しながらも，日本語として無理なく発音できるような形に写すことを心がけた．

❷エジソン，フルベッキなどのように，すでに慣用形のできているものは，その形を尊重した．

❸ヴの文字は用いず，vは特記しないかぎりバ行音で表記した．

❹発音は，発音記号ではわかりにくいので，近似音を[ ]の中にカタカナで示した．ただしカタカナで表しにくい子音は，代りにヘボン式ローマ字の子音部分を掲げた．

[英語]

a——[**ア**][**エー**][**オー**]　Adamsアダムズ，Blakeブレーク，Allportオールポート

ai, ay——[**エー**]　Blaineブレーン，Thackerayサッカレー

borough, burgh——[**バラ**]　Edinburghエジンバラ

di——[**ディ**]．慣用で[**ジ**]　Dickensディケンズ，Edisonエジソン

ey——語尾では[**イー**]　Stanleyスタンリー

Mac, Mc——[**マク**]．慣用で[**マック**]　Macmillanマクミラン，MacArthurマッカーサー

or——[**アー**][**オー**][**オア**]　Wordsworthワーズワース，Morganモーガン，Highmoreハイモア

qu——[**ク**]　Queen Annクイーン・アン

s——語尾で，cs, ks, ps, tsの場合を除き，おおむね[**ズ**]．　Adamsアダムズ

son——語尾で[**ソン**]．　Tennysonテニソン(スンとしない)

tew——[**チュ**]　Stewartスチュアート

ti——[**ティ**]．慣用で[**チ**]．　Tiffanyティファニー，Chartistチャーチスト

tu——[**チュ**]　Tudorチューダー

wh——[**ホ**]　Whitmanホイットマン

[ドイツ語]

ä——[**エ**][**エー**]　Thälmannテールマン

äu——[**オイ**]　Sträudlinシュトイトリン

b——語末では[**p**]　Jakopヤーコプ

c——e, iの前では[**ツ**]，他の場合は[**k**]　Celleツェレ

ch——[**ハ**][**ヒ**]．ただしchsの場合は[**ks**]　Feuerbachフォイエルバハ，Kircherキルヒャー，Sachsザックス

cs, cz——[**チ**]　Czernyチェルニー

d, dt——語末では[**ト**]　Dortmundドルトムント，Wundtブント

ei, ey——[**アイ**]　Heineハイネ，Freitagフライターク

er——[**アー**][**エル**]　Mahlerマーラー，Sternheimシュテルンハイム

eu——[**オイ**]　Freudフロイト

g——[**g**]．ただし語末では[**k**]，-igは[**イヒ**]，-ngは[**ング**]　Georgゲオルク，Ludwigルートウィヒ，Minnesangミンネザング

j——[**y**]　Jensenイェンゼン

ö, oe——[**エ**]または[**エー**]　Kölnケルン，Goetheゲーテ

pf——[**フ**]．語尾では[**プ**]　Pfalzファルツ，Schwarzkopfシュワルツコップ

qua, qui, que——それぞれ[**クワ**]，[**クウィ**]，[**クウェ**]　Quantzクワンツ，Quiddeクウィッデ，Quellクウェル

s——語頭で母音を伴うとき，または前後に母音があるときは，おおむね濁音　Seghersゼーガース

sp, st——語頭では[**シュプ**][**シュト**]　Spielシュピール，Steinシュタイン

tsch, tzsch——[**チ**]または[**チュ**]　Nietzscheニーチェ，Treitschkeトライチュケ

v——おおむね[**f**]　Vossフォス

w——[**ワ**][**ウィ**][**ウェ**][**ウォ**]．ただしwu, wüは，それぞれ[**プ**]，[**ビュ**]　Weillワイル，Webernウェーベルン，Wuppertalブッパータール，Würzburgビュルツブルク

z——[**ts**]　Zeppelinツェッペリン

[フランス語]

ai, ay——[**エー**]　Aiméエーメ

aim, ain, anc, and, ans, ant——[**アン**]　Alainアラン，Rollandロラン

ard, art——[**アール**]　Éluardエリュアール

au, ault, aux——[**オー**]　Rimbaudランボー，Perraultペロー，Malrauxマルロー

bourg——[**ブール**]　Cherbourgシェルブール

c——e, i, yの前で[**s**]，他の場合は[**k**]　Cézanneセザンヌ，Camusカミュ

ç——[**s**]　Françoisフランソア

ch——[**sh**]　Champollionシャンポリオン

eau, eaux——[**オー**]　Rousseauルソー，Bordeauxボルドー

eim, em, en, end, ens, ent——[**アン**]　Reimsランス，Laurencinローランサン

gn——[**ny**]　Sévignéセビニェ

gue, gué, gui——それぞれ[**グ**]，[**ゲ**]，[**ギ**]　Guérinゲラン，Guillaumeギヨーム

h——無音　Henriアンリ

il, ill, ille——[**イユ**]　Weilベイユ，Bataillebバタイユ，Corneilleコルネイユ

in——[**アン**]　Chopinショパン

œ——[**ウー**]　Cœurクール

ou, oud, out, oux——[**ウー**]　Fournierフールニエ，Giraudouxジロードゥー

oi, oy——[**オア**]　Poincaréポアンカレ，Bonnefoyボンヌフォア

que, qué, qui——それぞれ[**ク**]，[**ケ**]，[**キ**]　Montesquieuモンテスキュー

tion——[**シヨン**]　Action françaiseアクシヨン・フランセーズ

tou——[**トゥー**]　Toulonトゥーロン(ツーロンとしない)

tu——[**チュ**]　Turgotチュルゴ

[イタリア語]

c——e, iの前では[**ch**]，他の場合は[**k**]　Cecco d'Ascoliチェッコ・ダスコリ

cchio——[**キョ**]　Porto Vecchioポルト・ベッキョ

ch——e, iの前で[**k**]　Cechiチェッキ

cia, cio——[**チャ**][**チョ**]　Masaccioマサッチョ

g——e, iの前では[**j**]，ほかの場合は[**g**]　Genovaジェノバ，Galileiガリレイ

gh——e, iの前で[**g**]　Ghibertiギベルティ

gia, gio, giu——それぞれ[**ジャ**]，[**ジョ**]，[**ジュ**]　Giannini ジャンニーニ，Giottoジョット，Giuliaジュリア

gl——gは無音(外来語は[**gl**])　Badoglioバドリオ

gn——[**ny**]　Bologna ボローニャ

h——無音

ll——[**l**]　Corelliコレリ

rr——[**r**]　Torricelliトリチェリ

s——母音に挟まれたときは，おおむね[**z**]　Vasariバザーリ

sce——[**シェ**]　Scelbaシェルバ

sci——[**シ**]　Sciaccaシアッカ

sch——[**sk**]　Schiaparelliスキャパレリ

z, zz——しばしば[**ツ**]　Firenzeフィレンツェ

[スペイン語]

母音の上の´はアクセントの位置を示す．

c——e, iの前では[**s**]，他の場合は[**k**]　Cervantesセルバンテス，Cádizカディス

g——e, iの前では[**h**]，他の場合は[**g**]　Gil Roblesヒル・ロブレス，Goyaゴヤ

gua, gue, gui——それぞれ[グア], [ゲ], [ギ]　Guatemala グアテマラ, Guevara ゲバラ
h——つねに無音　Herrera エレラ
j——[h]　Don Juan ドン・フアン
ll——[ly]。ただし南アメリカのうちアルゼンチン, チリなどでは[ジ], ほかの国々では[y]の場合もある。Castilla カスティリャ, Allende アジェンデ, Callao カヤオ
ñ——[ny]　Cataluña カタルニャ
que, qui——それぞれ[ケ], [キ]　Queretaro ケレタロ, Guadalquivir グアダルキビル
rr——[r]　Sierra Nevada シエラ・ネバダ
x——[h][s][sh]　México メヒコ, Taxco タスコ, Xochicalco ショチカルコ
y——[y]　Ortega y Gasset オルテガ・イ・ガセット
z——[s]　Zorrilla ソリーリャ

[ポルトガル語]
ão——[アン]　São Vicente サン・ビセンテ
c——e, i の前では[s], ほかの場合は[k]　Carlos カルロス
ç——[s]　Bragança ブラガンサ
ch——[sh]　Machad de Assis マシャード・デ・アシス
g——e, i の前で[j], ほかは[g]　Geral de Goiás ジェラル・デ・ゴイアス
gue, gui——それぞれ[ゲ], [ギ]　Miguel ミゲル
h——つねに無音　Henrique エンリケ
lh——[ly]　Covilhã コビリャン
nh——[ny]　Minho ミーニョ
õe——[オンイ]　Camões カモンイス
x——[sh]　Xingu シングー

[オランダ語]
ae——[アー]　Gossaert ホッサールト
d——語尾では[ト]　Holland ホラント
ei, eij, ey——[エイ]　Eindhoven エイントホーフェン。Leiden ライデンは例外
g——ハ行音。-ngは[ング]　Groningen フローニンゲン
ij——[エイ][アイ]　Colijn コレイン, Nijmegen ナイメーヘン
j——[y]　Jansen ヤンセン
ou——[アウ]　Gouda ハウダ
v——[f]　Van Mander ファン・マンデル
w——ワ行音　Willem ウィレム

[デンマーク語]
å——[オ][オー]　Århus オーフス
bjerg——[ビアウ]　Esbjerg エスビアウ
borg——[ボー]　Trelleborg トレレボー
d——[z]。語中しばしば無音, 語尾で[ト]　Odense オーゼンセ, Roskilde ロスキレ, Knud クヌット
ei, ej——[アイ]　Vejle バイレ
ø, ö——[エ]　Nykøbing ニュケピング
v——a, e, o, ø, ö のあとで[ウ], ほかはバ行　Frederikhavn フレゼリクハウン
y——[y]　Fyn フューン

[スウェーデン語]
å——[オ][オー]　Ångström オングストレーム, Borås ブーロース
ä——[エ][エー]　Mälaren メーラル湖
b——語尾では[p]　Jacob ヤコブ
berg, borg——後出rgを参照。
c——e, i, y の前では[s], ほかの場合は[k]　Celsius セルシウス
dj——[y]　Djursholm ユルスホルム
ds——[ts]　Arvidsjaur アルビツヤウル
eu——[オイ]　Creutz クロイツ
gä, ge, gö——[イエ]　Gävle イェブレ, Georg イェオリ, Göta イェータ
hj——[y]　Hjelm イェルム
j——[y]　Jönköping イェンヒェーピング
k——[hy]　Kellgren ヒェルグレン
kj——[hy]　Kjellen ヒェレン
ll——[l]　Halland ハランド
o——長音のとき[ウー]　Kronoberg クルーノベリ
ö——[エ][エー]　Örebro エレブルー
qu——[クブ]　Almquist アルムクビスト
r——t, d, l, n, s の前では無音　Hornavan フーナバン
rg, rgh——[リ]　Rydberg リュードベリ, Helsingborg ヘルシングボリ
sk——ä, e, i, ö, y の前では[sh], ほかの場合は[sk]　Skellefte シェレフテ
sj, skj, sti, stj——[sh]　Stjernhjelm シェルンイェルム
w——ウ行音　Swedenborg スウェーデンボリ
y——[ユ][ユー]　Nordenflycht ノルデンフリュクト
z——[s]　Berzelius ベルセリウス

[ノルウェー語]
å——[オ][オー]　Åndalsnes オンダルスネス
aa——[オ][オー]　Aasen オーセン
b——s, t の前で[p]　Ibsen イプセン
berg, borg——それぞれ[ベル], [ボル]　Sarpsborg サルプスボル
bje——[ビャ]　Bjerknes ビャルクネス
bjø——[ビョ]　Bjørnson ビョルンソン
c——e, i, y の前では[s], ほかの場合は[k]　collett コレット
ch——[h][k]　Trondcheim トロンヘイム, Christofer クリストフェル
d——語中では無音が多く, 語尾では[t]または無音。l, n のあとでは無音　Sigurd シーグル, Nordkapp ノールカップ。さらに後出のndを参照。
g——[g]。ただし軟母音の前で[y], s, t の前では[k], 語尾では無音が多い　Gille イレ, Vogt フォークト, Tønsberg テンスベル
gh——語尾では[g]　Krogh クログ
hj——[y]　Hjort ヨルト
j——[y]　Jordet ヨーレ
ki——[ヒ][キ]　Kistrand ヒーストラン
kj——[ヒ]　Steinkjer ステインヒエル
nd——land, sand, sund は, それぞれ[ラン], [サン], [スン]　Vigeland ビーゲラン, Kristiansand クリスティアンサン
ø——[エ]　Tromsø トロムセー
qu——[クブ]　Quisling クビスリング
sk——e, i, j, y の前で[sh], ほかでは[sk]　Skiboton シーボトン
v——s, t の前では[f], ほかの場合はおおむねバ行音　Drevsjø ドレフシェー

[フィンランド語]
ä——[ア]　Hämeenlinna ハメーンリンナ
h——[h]　Ahvenanmaa アハベナンマー
j——[y]　Cajander カヤンデル
ö——[オ]　Södergran ソーデルグラン
y——[y]　Jyväskyla ユバスキュラ
重母音は長音　Paasikivi パーシキビ

[ハンガリー語]
母音の上の ´ は長音。
c——[ツ]　Miskolc ミシュコルツ
cs——[チ]　Mohács モハーチ
gy——[ジ]　Györ ジェール
j——[y]　Jókai ヨーカイ
ly——[y]　Szombathely ソンバトヘイ
ny——[ニュ]　Batthyány バッチャーニュ
ö——[エ]　Körös ケレシュ
ő——[エー]　Gödöllő ゲーデーレー
s——[sh]　Maros マロシュ
sz——[s]　Szeged セゲド
th——[t]　Horthy ホルティ
ts——[チ]　Szakasits サカシッチ
ty——[チ]　Mátyás マーチャーシュ
ü——[ユ]　Hegedüs ヘゲデュシュ
ű——[ユー]　Csűry チューリ
z——[ツィ]　Goldzther ゴルトツィーハー
zs——[ジ]　Nagykanizsa ナジカニジャ

[ルーマニア語]
ă——[ア]　Călărasi カララシ
c——e, i の前では[ch], ほかでは[k]　Suceava スチャバ, Bacău バカウ
ch——[k]　Valachia ワラキア
ea——子音に後続するときは[eya], ただしcまたはgにつづくときは, それぞれ[チャ], [ジャ]　Oradea オラデヤ, Zimnicea ジムニチャ
g——e, i の前では[j], ほかの場合は[g]　Argeş アルジェシュ, Galaţi ガラツィ
gh——[g]　Gheorghiu-Dej ゲオルギウ・デジ
ia——[ヤ]　Iasi ヤシ
iu——子音に後続するときは[iu], ただしciu, giuの場合は[チュ], [ジュ]　Sibiu シビウ, Giurgiu ジュ

ルジュ
s ——[s]。前後に母音があるとき[z]　Satu Mareサトゥ・マレ，Mourousiムルージ
ş ——[sh]　Timişoaraティミショアラ
ţ ——[ts]　Constanţaコンスタンツァ
v ——バ行音　Vladimirescuブラディミレスク

[ポーランド語]
ą ——[オン]　Śląskシロンスク
b ——無声子音の前と語尾では[p]　Jakubヤクプ
c ——[ツ]または[ch]　Wrocławブロツワフ，Szczecinシュチェチン
ć ——[ch]　Zamość サモシチ
ch ——[h]　Chełmヘウム
cz ——[ch]　c参照。
drz ——[ジ]　Andrzejアンジェイ
ds ——[ツ]　Piłsudskiピウスツキ
dz ——[ジ]　Radziwiłłラジビウ
dź ——[ジ]。語尾では[ch]　Łódźウッチ
ę ——[エン]　Oświęcimオシフィエンチム
ie ——[イェ]。ただしg，k，mに後続する場合は[イエ]　Sienkiewiczシェンキエビチ
j ——[y]　Janヤン
ł ——[w]　Władysławブワディスワフ
ń ——[ン]　Gdańskグダンスク
ó ——[ウ]　Krakówクラクフ
rz ——[ジ]。無声子音の後につづく場合は[シ]，語尾で[シュ]　Rzeszówジェシュフ，Kazimierzカジミエシュ
ś ——[sh]　Pizemyślプシェミシル
sz ——[sh]　Szczecinシュチェチン
w ——バ行音。無声子音の前と語尾では[f]　Wasilewskiバシレフスキ
y ——[i]　Ignacyイグナツィ
ż ——[ジ]　Różewiczルジェビチ
ź ——[ジ]　Kniaźninクニャジニン

[チェコ語]
母音の上の´は長音。
c ——[ツ]　Zápotockýザーポトツキー
č ——[チ]　Čechyチェヒ
ch ——[h]　Máchaマーハ
dž ——[ジ]　Hodžaホジャ
j ——[y]　Jablonecヤブロネツ
ň ——[ny]　Aňaアニャ，Plzeňプルゼニ
ř ——[ジ][シ]　Přerovプジェロフ
š ——[sh]　Prešovプレショフ
ť ——[チ]　Piešťanyピエシチアニ
ů ——[ウー]　Havlíčkův Brodハブリーチクーフ・ブロト
v ——バ行音。語尾では[f]　Karlovy Varyカルロビ・バリ
y ——[イ]　前行例参照。
ž ——[ジ]　Žatecジャテツ

[セルビア・クロアティア語]
c ——[ツ]　Subotica スボティツァ
ć ——[ch]　Obrenović オブレノビッチ
č ——[ch]　Bečejベチェイ
đ ——[ジ]　Karađorđeカラジョルジェ
j ——[y]　Skopjeスコピエ
š ——[sh]　Dušanドゥシャン
ž ——[ジ]　Mažuranićマジュラニッチ

[ロシア語]
ロシア文字のラテン文字への転写については〈ロシア文字〉の項目を参照されたい。
v ——a以外の母音の前ではバ行音，aの前ではしばしば[ワ]，子音の前では[フ][ウ]　Volgaボルガ，Vasiliiワシーリー，Vsevolodフセボロド，Vrangel'ウランゲル
d ——diとdeは，それぞれ[ジ]，[ジェ]，慣用で[ディ]，[デ]　Vladimirウラジーミル，Fadeevファジェーエフ，Dekabristデカブリスト
e ——[エ]([イェ]としない)　Esenínエセーニン，Eniseiエニセイ
zh ——[ジ]。語尾および無声子音の前で[シ]　Zhukovskiiジュコーフスキー，Merezhkovskiiメレシコフスキー
ii ——[イー]　Dostoevskiiドストエフスキー
o ——[オ]。慣用で[ア]　Ogaryovオガリョフ，Ogonyokアガニョク
t ——ti，te，tuは，それぞれ[チ]，[テ]，[トゥ]　Tikhonovチーホノフ，Tereshkovaテレシコワ，Tukhachevskiiトゥハチェフスキー
kh ——ハ行音　Khlestakovフレスタコフ
ts ——[ts]　Tsvetaevaツベターエワ
ch ——[ch]　Chekhovチェーホフ
sh ——[sh]　Shishkinシーシキン
shch ——[shch]　Shchedrinシチェドリン
' ——硬音記号　S'edinスエージン
y ——[イ]。慣用で[ウイ]　Vyshnevskayaビシネフスカヤ，Gromykoグロムイコ
' ——軟音記号。[イ]または無音　Gogol'ゴーゴリ，Kazan'カザン

[古代ギリシア語]
ギリシア文字のラテン文字への転写については，〈ギリシア文字〉の項目を参照されたい。
ch ——[k]　Chimairaキマイラ
ph ——[f]　physisフュシス
th ——[t]　Theophrastosテオフラストス
x ——[ks]　Xenophōnクセノフォン
y ——[y]　Dionysosディオニュソス
❶母音α，ι，υの長短は区別しなかった。またアクセントも付さなかった。
❷見出しには原則として音引を用いなかったが，エピステーメーepistēmē，プシュケーpsychēなど少数の例外もある。
❸ビザンティン時代以降のギリシア語については必ずしも以上の基準を適用しなかった。

[ラテン語]
c ——[k]　censorケンソル
j ——[y]　Justinianusユスティニアヌス
ll ——[l]　Marcellusマルケルス
ph ——[f]　Phrygiaフリュギア
qu ——[ku]　Quintilianusクインティリアヌス
rh ——[r]　rhetoricaレトリカ
th ——[t]　Theodosiusテオドシウス
v ——[w]　Valensウァレンス
ただし，おもに近世以降の人名・事項については慣用によりバ行音も併用　Vesaliusベサリウス
y ——[y]。慣用で[イ]　Palmyraパルミュラ，Syriaシリア
❶二重母音ae，au，oeなどは，それぞれ[アエ]，[アウ]，[オエ]　Caesarカエサル
❷見出し，原綴ともに母音の長短は原則として省略，アクセントも省略した。

[アラビア語]
アラビア文字のラテン文字への転写については，〈アラビア文字〉の項目を参照されたい。
❶ʾ(ハムザ)とʿ(アイン)はア行，khはハ行，dhはザ行，ṣはサ行，ḍはダ行，ṭはタ行，ẓはザ行音を用いてかな表記する。
❷定冠詞al-については，[アル]と表記する。ただし，語頭のal-は，かな表記では省略する　al-Kindiキンディー，Ibn al-ʿArabīイブン・アルアラビー(イブヌル・アラビーとしない)
後に太陽文字(t，th，d，dh，r，z，s，sh，ṣ，ḍ，ṭ，ẓ，l，n)がつづくときは，[アッ]，[アン](nの場合)とする。
❸語頭のハムザ記号と，語末のターマルブータ(ō，しばしばh，tと転写される)は省略する　madīna(madīnat，madīnahとはしない)
❹人名の間にくるibnはb.で示し，[ブン]と表記する　Khālid b. al-Walīdハーリド・ブン・アルワリード
❺母音はa，i，u，長母音はā，ī，ū，二重母音はay，awと転写する。
❻母音を伴わないハムザとアインは，その前の母音を長音とする　Ka'baカーバ，ta'rīkhターリーフ

[ペルシア語]
文字の転写は，アラビア語の規則に準じ，p，ch，gを補う。短母音はa，e，o，二重母音はou，eyを用いるが，18世紀以前の人名・事項については，アラビア語の転写にならう　Khomeynīホメイニー，ʿUmar Khayyāmウマル・ハイヤーム(オマル・ハイヤームとしない)
vはバ行音を用いたが，古代ペルシア語の場合は，[ワ]，[ウ]を併用した
Pahlaviパフラビー，Varahranワラフラン，Vistahmウィスターム

[トルコ語]
オスマン朝以後については，原則として現代トルコ語で用いるラテン文字の綴字と表音規則にならう。特殊な母音・子音は下記のとおり。
ı(点なしアイ)原則としてウ音，ö　オ音，ü　ユ音，ğ　イ，ウないし長音，c　ジ

ュ音，ç チュ音，ş シュ音
v は[ワ]，[ウ]で表記した　vezir ウェジール，Van ワン

[サンスクリット]
サンスクリット文字のラテン文字への転写については，〈サンスクリット〉の項目を参照されたい．

ṛ，ṝ ——それぞれ[リ]，[リー]　Ṛg-Veda リグ・ベーダ
e，ai，o，au ——つねに長音　kośa コーシャ
k，kh ——[k]　khecara ケーチャラ
g，gh ——[g]　ghṛta グリタ
c，ch ——[ch]　Chāndogya チャーンドーギヤ
j，jh ——[ジ]　Virāj ビラージ
t，th ——タ行音．[タ]，[ティ]，[トゥ]，[テー]，[トー]．子音の前では[ト]　Tathāgata タターガタ
ṭ，ṭh ——タ行音．[タ]，[ティ]，[トゥ]，[テー]，[トー]．子音の前で[ト]　nāṭya ナーティヤ
d，dh ——ダ行音．[ダ]，[ディ]，[ドゥ]，[デー]，[ドー]．子音の前で[ド]　dharma ダルマ
ḍ，ḍh ——ダ行音．[ダ]，[ディ]，[ドゥ]，[デー]，[ドー]．子音の前で[ド]　iḍā イダー
n，ṇ ——[n]　Purāṇa プラーナ
ñ ——子音の前で[n]，母音の前で[ny]　pañca パンチャ，jñana ジュニャーナ
p，ph ——[p]　Kapha カパ
b，bh ——[b]　sabhā サバー
ṣ，ś ——[sh]　śeṣa シェーシャ
ts ——[ts]　matsya マツヤ
y ——[y][iy]　Aṣṭādhyāyī アシュターディヤーイー
ḥ ——母音の後につづき，[h]に前の母音を軽くつける．後に子音がつづく場合は促音　duḥkha ドゥッカ
ṃ ——[n]．母音につづき，鼻母音化する　Mīmāṃsā ミーマーンサー

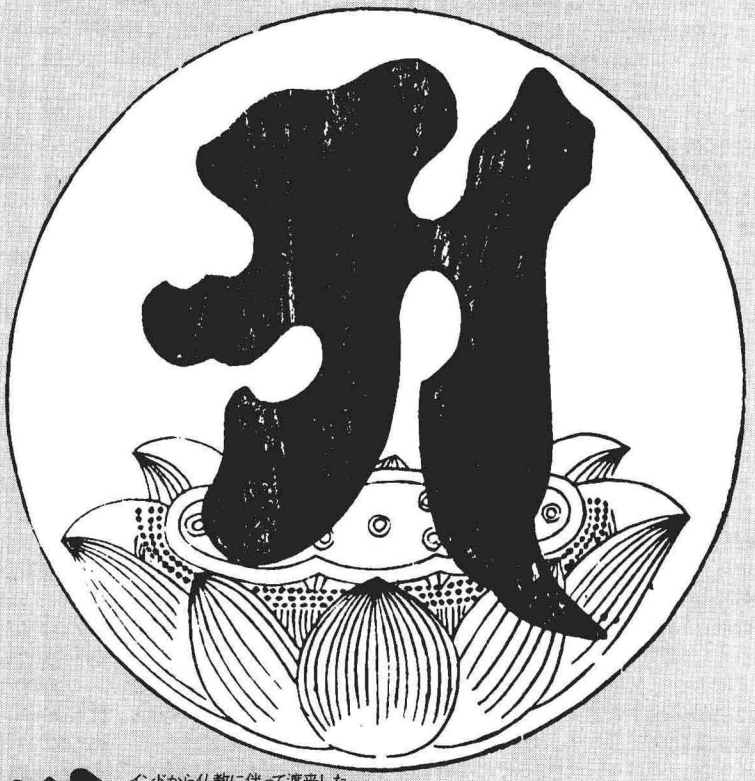
記号および略符号

a ——アール
A ——アンペア
Å ——オングストローム
A. D. ——紀元後
atm ——気圧
$[\alpha]_D^{20}$ ——比旋光度（20℃におけるナトリウムD線に対し）
bar ——バール
B. C. ——紀元前
B. P. ——現在（1950年）以前
Bq ——ベクレル
c ——センチ（$=10^{-2}$）
C ——クーロン
℃ ——セ（摂）氏温度
cal ——カロリー
Cal ——大カロリー
cc ——シーシー（$=cm^3$）
cd ——カンデラ
CGS ——CGS単位
cm ——センチメートル
cm^2 ——平方センチメートル
cm^3 ——立方センチメートル
d ——デシ（$=10^{-1}$）
d^{15} ——比重（15℃における）
d- ——右旋性
D- ——D形異性体
dB ——デシベル
deg ——度（温度）
dg ——デシグラム
dl ——デシリットル
dl- ——ラセミ体
dm ——デシメートル
E ——東経
emu ——電磁単位
erg ——エルグ
esu ——静電単位
eV ——電子ボルト
F ——ファラド
°F ——カ（華）氏温度
g ——グラム
g ——重力加速度
G ——ギガ（$=10^9$）
Gal ——ガル
Gy ——グレイ
h ——時またはヘクト（$=10^2$）
H ——ヘンリー
ha ——ヘクタール
hPa ——ヘクトパスカル
Hz ——ヘルツ
J ——ジュール
k ——キロ（$=10^3$）
K ——ケルビン
kcal ——キロカロリー
kg ——キログラム
kgf ——キログラム重
km ——キロメートル
km^2 ——平方キロメートル
km^3 ——立方キロメートル
kV ——キロボルト
kW ——キロワット
kWh ——キロワット時
l ——リットル
l- ——左旋性
L- ——L形異性体
lm ——ルーメン
lx ——ルクス
m ——メートルまたはミリ（$=10^{-3}$）
M ——メガ（$=10^6$）
m- ——メタ
m^2 ——平方メートル
m^3 ——立方メートル
mb ——ミリバール
mg ——ミリグラム
mGal ——ミリガル
min ——分
MKS ——MKS単位
ml ——ミリリットル
mm ——ミリメートル
mm^2 ——平方ミリメートル
mm^3 ——立方ミリメートル
mmHg ——水銀柱ミリメートル
mol ——モル
μ ——マイクロ（$=10^{-6}$）
μm ——マイクロメートル
n ——ナノ（$=10^{-9}$）
N ——規定または北緯またはニュートン
nm ——ナノメートル
ns ——ナノ秒
o- ——オルト
p ——ピコ（$=10^{-12}$）
p- ——パラ
Pa ——パスカル
pH ——水素イオン濃度指数
ppb ——ピーピービー（10億分率）
ppm ——ピーピーエム（100万分率）
rad ——ラジアン
rpm ——毎分回転数
s ——秒
S ——ジーメンスまたは南緯
sr ——ステラジアン
Sv ——シーベルト
t ——トン
T ——テスラまたはテラ（$=10^{12}$）
V ——ボルト
W ——ワットまたは西経
Wb ——ウェーバー
Wh ——ワット時
° ——度
′ ——分
″ ——秒
% ——パーセント（百分率）
‰ ——パーミル（千分率）

◉母音の一つ．五十音図の第1，ア行ア列に位し，〈ア〉で表す．いろは歌では第36〈あ〉．◉もとの字形は，かたかなは阿(偏より)，ひらがなは安．◉古語で自称に用いる．◉遠い事物を指示する語(彼)．此(こ)，其(そ)に対して．◉梵．梵語．諸音，諸字の本源，漢字では阿をあてる．大日如来の種子，阿吽．◉阿[村]．熊本県天草郡天草上島の東北端(現，松島町の一地区)，――以上〈大辞典〉抄．◉国際音声字母では[a]．◉〈あ〉の擬音・擬態語＝あたふた，あっさり，あっぷあっぷ，あーん，あんぐり．

指文字を描いたおもちゃ絵，明治中期．

伝藤原忠家〈和歌体十種〉



インドから仏教に伴って渡来した悉曇文字(しったんもじ)による〈阿〉字―を．へら筆による特徴的な字形は，インドの葦ペンによって書かれたデーバナーガリー文字の脈動的な動きを日本へ運びこんだ．〈阿字は一切語言の根本にして衆字の母なり，凡そ最初に口を開く音，皆阿の声あり，故に衆声の母となす．内外の諸教皆この字より出生す〉と空海が断定したこの聖文字を，白光に輝くまろやかな月輪のなか，蓮花台上にすえ，その前に座して観相し，瞑想行をおこなう〈阿字観〉―上．

東―あたまかくして しりかくさず
西―あしもとから とりが たつ